

4月2日 四旬節第5主日

エシ 31:31～34 ヘブ 5:7～9 ヨハ 12:20～33

1. ヨハ

vv.20-21 「何人かのギリシア人が……。彼らは……“お願いします。イエスにお目にかかりたいのです”と頼んだ。」

初代教会の宣教は当初のユダヤ人から間もなく異邦人世界へと向けられ、ギリシア人を始めとする多くの異邦人がイエス・キリストの救いを受けて、交わりに加えられて行きました。民族宗教としてのユダヤ教から世界宗教としてのキリスト教へと、初代教会を導いた決定的要因は、イエス・キリストの死と復活による“罪の赦しと永遠の命の福音”でありました。キリストの死と復活に結ばれる洗礼の秘跡(ロマ6:3-4)によって、異邦人がユダヤ人と共に神の国を受け継ぐ者、同じ約束にあずかる者となる(エフェ3:6)ことが出来る時代が始まったのでした。ヨハネ福音書はこの出来事、キリストの死と復活という決定的な出来事に、私たちが注目するように導きます。

vv.23-24 「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきりしておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」

v.31 「今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。」

イエス・キリストの死を、単なる偉人伝や、私たちのための高度な道徳の手本のように考えてはなりません。それは、神がその独り子を“罪を償う供え物”(ロマ3:25)として、“時が満ちて”(ガラ4:4)歴史の中でお与えになった事件でありました。ですから私たちも、決して単なる入信の儀式としてではなくて、“キリストと共に葬られ、その死に与る”(ロマ6:4)ために洗礼を受けたことを理解しましょう。

2. ヘブ

キリストの救いは、信じる者を「死から救う」(v.7)救いです。

“死”とは、神の怒りによって“滅ぼされる”(イザ6:5)ことであります。詩篇は“人を塵に返す”神の怒りを畏れることを教えました(詩90)。“死”は神による創造の祝福の対極にあって、いわば神から不要品として捨てられること、“罪が支払う報酬”(ロマ6:23)であります。使徒パウロは「死に定められたこの体から、だれが私を救ってくれるでしょうか」と述べた後に、直ちに続いて「私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします」と、キリストの救いを賛美しました(ロマ7:24-25)。

この“死から救う救い”のために、キリストは人間と同じ者になられ(フィリ2:7)、私たちに代わって(父なる神への)従順を学ばれました(v.8)。キリストの受肉と死と復活は、神がその救済史の中に計画された御業であって、「私たちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦され」(エフェ1:7)、その完成である「秘められた計画」にあずかる者とされました(エフェ3:3-6)。

現代の通俗的キリスト教は、人々を“神の怒りへの恐れ”から遠ざけるような仕方で、“死”に対応して来ました。私たちが従来見て来た葬儀はその典型であり、今日論じられている末期医療とか安楽死ないし尊厳死の問題も、すべてその方向性によっています。“死”を怖くないもの、安らかで美しいものと思わせることによって、効果的に人々を“神の怒りへの恐れ”から遠ざけて来ました。

キリストの救いが、信じる者を「死から救う」(v.7)救いであることを、「来るべき怒り(終末の裁き)から私たちを救ってくださる」(1テサ 1:10)救いであることを、再び学ぶことは教会に提供されている四旬節の恵みであると知りましょう。

3. エレ

預言者エレミヤの語った「新しい契約」(v.31)は、キリストの血による新しい契約(1コリ 11:25)として実現しました。しかしそれは、救済史の完成である神の国を目指しているのであって、それを待たずにこの世において罪と死が克服されるという意味では決してありません。

近代の楽観的なキリスト教は、自らの努力によって地上に神の国を建設出来るという幻想を掲げました。キリスト教的平和は、人間の良心に訴えることによって、人々を罪から解放すると主張されています。しかし、預言者エレミヤが語った新しい契約は、救済史の完成を指し示す終末的預言でありました。

v.33 「すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」

使徒たちが宣教した救済史理解も、「その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいて」(ロマ 4:13)というものでありました。キリスト教的教育も、信徒訓練や外部世界への布教活動も、この地上に「死もなく、悲しみも嘆きも苦労もない」(黙 21:4)世界を造ることは出来ません。「信仰による義」だけが、救済史の完成を待ち望む信仰だけが、私たちを来るべき神の国の勝利に至らせてくださることを信じましょう(1コリ 15:50-57 参照)。 アーメン。

4月9日 受難の主日

イザ 50:4~7 フィリ 2:6~11 マコ 15:1~39

1. マコ

v.5 「しかし、イエスがもはや何もお答えにならなかったのも、ピラトは不思議に思った。」

総督ピラトは、正しい判断をすることが出来なくて、イエスを十字架刑に処してしまったのでしょうか。ユダヤ人の群衆は、イエスに対する祭司長たちのねたみによって扇動されて、“十字架につける”と最後まで叫び続けてしまったのでしょうか。それは十分に考え得る推測です。しかしそれでは、もし彼らが別の判断、別の行動に出ていたら、イエスは処刑されず、歴史は変わっていたであろうと主張することが、マルコ福音書の意図であったと考えるなら、それは間違っています。

聖書の中に登場する特定の人物たちを、私たちの聖書が語っているのとは違う観点から判断して、弁護したり名誉を挽回しようとするのは、古くから行われて来たことです。ごく最近では、イエスを裏切ったユダは実はイエスの最良の弟子で、ただ一人イエスから使命を授けられて正しく神の命令を遂行したという、2世紀頃のグノーシス主義の文書“ユダによる福音書”と呼ばれるものが発見されて、話題になっています。まさに典型的な、ユダの名誉挽回の第一級の史料であることは間違いありません。

私たちの聖書の中にある四福音書は、元来は“マルコによる(カタ・マルコン)”というように、著者と伝えられる使徒の名で呼ばれているものです。ところが1522年に初版が出たルター訳のドイツ語新約聖書でも、1611年初版の英語欽定訳聖書でも、“福音書”という表題がつけられていて、以後今日まで世界中で踏襲されて来ました。それはヨハネ福音書が「あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、信じてイエスの名により命を受けるため」(20:31)と語っているように、それがキリストの福音を伝えることを目的としている書物であると理解されて来たからです。この点で“ユダによる福音書”と呼ばれる新発見の文書は、ユダの名誉を挽回することによってグノーシス主義の論理を補強しようとしているに過ぎず、キリストの福音には全く触れていないようです。つまり“福音書”ではないらしいのです。

2.

総督ピラトも、ローマの兵士たちも、そしてユダヤ人たちもみな、彼らがもう少し賢くて正しい人たちであったなら歴史を変えていたであろう“罪深い人々”であったと論ずるために、福音書は書かれたものではありませんでした。

イエス・キリストの受肉と死と復活は、救済史の出来事であって、偶然の積み重ねによる歴史の悪戯のようなものではありませんでした。「イエスは、神の御前において憐れみ深い、忠実な大祭司となって、民の罪を償うために、すべての点で兄弟たちと同じようにならねばならなかったのです」(ヘブ 2:17)。そして十字架の死を通して「御自身の血によって、ただ一度聖所に入って永遠の贖いを成し遂げられたのです」(同

9:12)。

福音書の受難物語りが語っているのは、そこで詩 22 が、イザ 50 章が、53 章が、そしてイエスについて書かれたすべての聖書の言葉が(ルカ 24:44)実現して行ったということです。総督ピラトやローマの兵士たちも、ユダヤ人たちも、そこで起こっていることが自分たちの救いのための神の御業であるなどは、全く思ってもいませんでした。しかし「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださった」(ロマ 5:8)ことを、福音書の受難物語りは証言しようとしていました。

ですから、聖書の中に登場する特定の人物たちを、弁護したり名誉挽回しようとするのは、的はずれな論議であって、無益なものであると知しましょう。同様に私たちは、聖書に登場する総督ピラトやユダヤ人たちよりも少しだけ賢くなるのが“信仰”であるなどと、浅はかに考えないようにしましょう。“悔い改めて福音を信じる”とは、神の子イエス・キリストが「わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられた」(ロマ 4:25)ことを信じることなのです。

3.

受難の主日の公式祈願は、教会が使徒たちから受け継いだ福音を、ことさら強く、そして明らかに伝えています。

枝を持った会衆を祝福する祈り：「主キリストに喜び従うわたしたちが、(キリストと)共に永遠の都(天の)エルサレムに入ることが出来ますように。」

集会祈願：「わたしたちが、主と共に苦しみを耐えることによって、復活の喜びを共にすることが出来ますように。」

奉納祈願：「わたしたちの力では得ることの出来ないこの(罪の赦しと永遠の命の)恵みを、十字架のいけにえによって豊かにいただくことが出来ますように。」

拝領祈願：「あなたは独り子の死によって、信じる者に(復活の)希望を与えてくださいました。御子の復活によってわたしたちが、望みの地(神の国)に達することが出来ますように。」

アーメン。

4月16日 復活の主日

使 10:34～43 コロ 3:1～4 ヨハ 20:1～9

1. ヨハ

v.8 「見て、信じた。」

ヨハネ福音書がここで何を言っているのかを、私たちは正しく理解しなければなりません。これは主の復活の朝の弟子たちの心理描写をしているわけではありません。ヨハネ福音書が書かれた頃、既に原始教会は使徒たちによる力強い宣教によって、確固とした福音理解を土台とする共同体に成長していました。使徒たちは、彼らが目撃したイエスの死と復活の出来事が、神の偉大な贖いの行為であったという信仰によって宣教したのであって、自らの個人的主観的な心理描写を語ったものではありませんでした。

神は御子の死と復活によって人間に罪の赦しを提供し、将来キリストの再臨によって実現される“秘められた計画”を宣教させるために(ロマ 16:25)、使徒たちをお立てになりました。使徒たちの福音は、彼らが目撃した一連の出来事に対する彼ら自身の解釈ではなくて(v.9)、復活の主から教えられたものであり、聖霊が彼らを福音の証人としました(使 1:3,8, 2:11)。ですから教会の宣教はこの使徒たちの宣教の継承ないし継続であって、彼らが「見て、信じた」ものから決して切り離すことは出来ません。

このような使徒の証言を伝えるものとして、原始教会が福音書を生み出したことを、私たちは正しく理解しましょう。始めは理解出来なかったが、イエスが死者の中から復活された後に信じるようになった福音を伝えることが、使徒の使命であったからです(ヨハ 2:22, 12:16)。

2. コロ

カトリック教会が、“キリストは……ご自分の死をもってわたしたちの死を打ち砕き、復活をもってわたしたちに命をお与えになった”と教えているように(典礼暦年と典礼歴に関する一般原則 18)、私たちが洗礼の秘跡によって「キリストと共に復活させられた」(v.1)という信仰を抜きにして、“過越の神秘”を正しく理解することは出来ません。なぜならそれは使徒たちから伝えられた福音への信仰に関わる事柄であって(ロマ 6:8)、今はまだ隠されており(v.3)、将来現されること(v.4)だからです。

復活節の祝いは、際立って福音的な祝いでありますから、キリストが御自分の死と復活によって成し遂げられた“贖いの福音”、“罪の赦しの福音”が正しく宣べ伝えられ、受け入れられていることが重要な前提になります。福音、それも使徒たちから伝えられた福音の宣教が軽んじられているところでは、それは単なる“お祭り騒ぎ”になってしまって、喜びのうちに一同が「上にあるものを求める」(v.1)祝いにはなりません。しかし従来、“他宗教にお祭りがあるように、キリスト教にもお祭りがある”というレベルで、一般には理解される傾向がありました。

3. 使

v.42 (イエスは死者の中から復活した後、)「御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、私たち(使徒たち)にお命じになりました。」

第二バチカン公会議は、教会の宣教の使命を“教会憲章”の中で明確に述べ(17)、さらにそれに続いて“教会の宣教活動に関する教令”を布告して、全世界のキリスト者に呼びかけました。

過去数世紀間のキリスト教は、どちらかと言うと“福音の宣教”ということよりも“キリスト教文化の拡張”による改宗者獲得に力点を置いて来ました。それはしばしば宗派的、教派的拡張主義という形で現れ、特に西欧から見た外国伝道の場合には、教育や医療などと結びつきながら伝道団体によって行われる改宗者獲得運動でありました。この傾向は日本の場合にも顕著で、今も信者の多くが“信徒使徒職”をそのように理解しています。

しかし、第二バチカン公会議が説いた宣教活動とは、使徒たちから伝えられた福音の宣教のことであって、それは個人の魂の獲得を、個人の信仰覚醒を目指すものなのです。信徒一人一人が自らキリストの福音によって“神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰”(使 20:21)に目覚めていなくては、キリスト教拡張運動は出来ても、キリストの福音の証しをたてることは出来ません。

私たち現代のキリスト者にとって、主の復活を祝うことは、まさにこの使徒たちの証言の継承に参加することであると知りましょう。“キリスト教文化の拡張”ではなくて、“福音の宣教”によって“信徒使徒職”の使命を果たすことは、復活のキリストから 21 世紀を歩み始めた私たち会衆に期待されている光栄ある課題でなくてなんでしょうか。 ハレルヤ、アーメン。

4月23日 復活節第2主日

使 4:32～35 1ヨハ 5:1～6 ヨハ 20:19～31

1. ヨハ

w.21-23 「イエスは言われた。“……父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす。”
そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。“聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。”」

教会の歴史の起源は、使徒たちの宣教にあるということ、そしてその使徒たちの宣教の起源は、復活されたキリストによる派遣にあることを理解しましょう。復活節は、他のすべての期節に勝って、私たちがひときわ使徒たちの宣教に耳を傾けるように期待されています。

その使徒の宣教とは、イエス・キリストによる罪の赦しと永遠の命の福音の宣教であって、代々の時代のキリスト者はこれを聞くことによって、“イエスは神の子メシアであると信じ”、“信じてイエスの名によって命を受け”(v.31)続けて来ました。

しかし教会が使徒たちの宣教に無関心となり、それよりも教育や医療や福祉と結びついたキリスト教文化の拡張に重点を移すと、やがてそれは宗派的教派的な改宗者獲得競争を目指す運動団体に変化します。私たちが知っている20世紀の教会は、そのような傾向を多分に持った集団でありました。

教会は使徒たちの宣教に耳を傾けることによってだけ、真の教会になることを、21世紀のキリスト者は再発見しなければなりません。復活のキリストは「だから、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて初めのころの行いに立ち戻れ」と、私たちに呼びかけておられます(黙 2:5)。

2. 使

かつてある共産主義系の学者たちはこのテキストを解釈して、原始キリスト教は社会革新運動であった、イエスはプロレタリアートの解放者であったと主張しました。ラテンアメリカにおける抑圧と貧困に対する抵抗から生まれて、現在も発展中の“解放の神学”も、これに類似した傾向を強く示しています。

しかしこのテキストは、エルサレム教会でその初期に、それも一時期だけ見られた特殊な現象を伝えているに過ぎず、このような共同生活はユダヤの教会にも異邦人の教会にもその後引き継がれることなく、早晩消え去ったものでした。

使徒言行録が強調しているのは、使徒たちによるキリストの福音の宣教が、力強く進められて行ったことでした。エルサレム教会における信者の共同生活が、宣教活動の重荷となることを防ぐために、七人の奉仕者が選任されましたが、彼らも奉仕だけに終始し得ず、間もなく使徒の後を追って福音の宣教に邁進したのでした(使 6-8章)。私たちはその中のステファノとフィリポについてのかかなり詳しい記述を読むことが出来ます。教会は使徒たちの宣教、使徒たちに起源する福音の宣教に耳を傾ける人々の増加に伴って成長し、確立して行きました。

私たちが知っているように、代々の時代の司教たちは使徒たちの後継者と呼ばれて来ました。“彼らは使徒の後継者であって使徒ではない”という当然の事実に、私たちはもう一度注目する必要があります。彼らは、教会がいつの時代にも“使徒たちの宣教”に耳を傾けるように奉仕する役務を受けたのであって、それによって代々にわたって「使徒的伝承が全世界に表され、守られている」と、教会憲章(20)は教えています。それは聖職位階にある人々の栄誉であると言ってよいでしょう。

さらに、使徒たちに起源する福音の宣教が教導職だけのものであって、信徒には関係のないことと誤解される傾向があることに、注意を喚起する必要があります。教会憲章は「信徒の使徒職は教会の救霊活動そのものへの参与であり、すべての人は洗礼と堅信を通して主自身からこの使徒職に任命される」(33)と述べ、「信徒は現世的な仕事に従事しているときでも、世に福音を告げるための崇高な働きをすることが出来、またそうしなければならない」(35)と教えています。教導職も信徒も共に、使徒たちの宣教に耳を傾けるという基本から離れては、正しく教会の救霊活動に参加することが出来ません。

3.13/8

v.4 「世に打ち勝つ勝利、それは私たちの信仰です。」

その信仰とは、罪の赦しの福音を宣教させるために使徒たちをお遣わしになった神の子キリストを信じる信仰であります。このイエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義とされるために復活させられました(ロマ 4:25)。この御子に関する福音(ロマ 1:3)こそは、信じる者すべてに救いをもたらす神の力です(ロマ 1:16)。

私たちにあって今年の復活節が、他のすべての期節に勝ってひととき、使徒たちの宣教に耳を傾ける時となり、キリストの体である教会を造り上げて行くことに益となりますように。

ハレルヤ、アーメン。

4月30日 復活節第3主日

使 3:13~19 | ヨハ 2:1~5a ルカ 24:35~48

1. ルカ

v.37, v.41 「彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。……彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、……」

福音書に描かれているイエスと弟子たちの物語りは、キリスト教と縁のない世間の人には、不思議で理解し難いという印象を与えるものです。ところが、これが既に信者となった人々には、当たり前なこと、当然の事実を記録した物語りのように見えてしまう傾向があります。たとえば私たちにとって耳慣れた日曜学校の教師の語る福音書物語りを思い浮かべれば、それはある程度納得できることです。まるでそれは物語りの結末を前もって知っている映画の観客たちが、登場人物であるイエスの弟子たちの驚きうろたえている姿を、昔々の出来事、他人事でもあるかのように鑑賞しているのに似ています。

しかし、本来聖書が伝えようとしているのは、そのいずれでもありません。使徒ペトロは次のように証言しました。「神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。しかしそれは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまりイエスが死者の中から復活した後、と一緒に食事をした私たち(使徒)に対してです。」(使 10:40-41) その使徒たちの体験の生々しい印象を、このテキストは私たちに伝えています。現代人である私たちと同様に、原始教会の大多数の信者たちも、復活されたイエスを直接見たことがありませんでした(1ペト 1:8)。歴史の教会は今日に至るまで、使徒たちの証言によって信じて来たのです(ヨハ 17:20, 20:29 参照)。

福音は決して弟子たち自身の創作に起源するようなものではありませんでした。ですから、彼らはキリスト教の教祖ではありません。福音の起源は、弟子たちが聞いた、復活のキリストによる旧約聖書の再解釈でありました。その核心部分が、次のように述べられています。

vv.46-47 「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」

使徒たちは「これらのことの証人」(v.48)、「キリストの証人」(使 1:8)、「主の復活の証人」(使 1:22, 2:32, 3:15)でありますから、現代のキリスト者も、時代が変わったといえども、使徒たちが告げ知らせたものに反する“別の福音”を決して宣教したり信じてはならないのです(ガラ 1:1-9 参照)。

2. 使

「その名を信じる信仰」(v.16)とは、イエス・キリストの名による罪の赦しの福音を信じることです。その罪とは、キリストを拒み(v.14)、キリストを殺した(v.15)罪に他なりません。それはかつてのユダヤ人たちの罪であるだけでなく、全世界の(1ヨハ 1:2)、すべての時代の人の(ロマ 5:12、1コリ 15:22)罪であって、私

たちも皆かつてはこの罪の中に閉じ込められていました(ガラ3:22)。しかし、キリストの福音は“罪の赦しを得させる悔い改めの福音”でありますから、私たちもこのキリストに立ち帰って(v.19)、信じて救われました。

使徒たちが宣教したのとは違う仕方では“悔い改め”を説明し、使徒たちが伝えたものとは違う内容の“信仰”を教えるなら、それは教会の宣教ではありません。21世紀のキリスト者は、自分自身と教会との過去を深く吟味してみる必要があります。

3. Iヨハ

「神の掟」(v.3)、「神の言葉」(v.5)とは、「神の子イエス・キリストの名を信じ、この方が私たちに命じられたように、互いに愛し合うことです」(Iヨハ3:23)。

主日のミサを共にささげるために、キリストの祭壇を囲む群である私たち教会に、復活のキリストは今朝も、互いに愛し合う結びつきを期待しておられます。聖書はこの愛を、共に救いに与っている“兄弟”への愛として繰り返し語っています(Iヨハ2:10, 4:20-21、Iテサ4:9-10)。なぜならそれは、“神の子イエス・キリストの名を信じる信仰”を互いに強め支え合うための、“福音に共にあずかる者となるための(Iコリ9:23)”兄弟愛だからです。この認識が不十分なままで、ミサの中で形式的に手をつなぎ合ったり、抱擁し合ったりしても、それで“仲良しクラブ”は生まれても、真のキリストの体としての教会は育ちません。

共に信仰によって罪の赦しを受け、義とされたという事実が、その認識が、“教会を造り上げる兄弟愛”を生み出す源泉であることを思い、今朝も記念唱を歌おうではありませんか。

司祭：信仰の神秘。

会衆：主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで。

ハレルヤ、アーメン。